おたがいさまのチカラで創る旭っ子フェスティバルＲ（リニューアル）版
～一人ひとりのできることを結集！～

浜田市立今市公民館

１　浜田市立今市公民館の概要

浜田市旭自治区は県中央部よりやや西南寄りに位置し、南側は広島県北広島町に接しており、今市・木田・和田・都川・市木公民館を有する５地区からなる。

平成 28 年 12 月末の人口は自治区全体で 2,883 人、内 15 歳未満は 338 人で、認定こども園に 96 人、本年度、統合小学校として新設された旭小学校に 112 人、旭中学校に 53 人が在籍している。(平成29年2月現在)

今市地区は、市役所の支所をはじめ諸機関が立地し自治区の約半数 1,500 人が居住する中心的地域であるが、平成 20 年 10 月に開所した島根あさひ社会復帰促進センター（矯正施設）による新たな地域住民の増などから、４つある自治会間で人口や世帯数、高齢化率などに極端なバラつきがみられ、それが住民同士の‘つながり’の希薄化の一因にもなっていると考えられる。

２　事業の概要

（１）事業のねらい

核家族世帯、高齢者世帯など置かれた個々の生活環境から生じる「自分一人くらいは…」という当事者意識の低さが地域を弱らせ、お互いの関係性の希薄化・孤立を招いていると思える。とはいえ、このような現状の中でも、同年代や趣味を通しての集まりには誘い合いが見受けられる事から、世代や生活環境を超えて地域住民が楽しみながら集える場を創り、縛りのない関係性を持ちながら住民同士の‘つながり’を育む事をねらいとする。

（２）具体的な取り組み

ア　会議

「今市ハッピーハロウィン」は平成 24 年を初回に、平成 25 年からは今市地区まちづくり推進委員会（四つ葉振興会）及び子ども部会（以下、子ども部会と表記）との共催事業として「旭っ子フェスティバル」の冠を付して実施した。本年度も７月初旬に公民館・子ども部会・保護者の三者が対等な立場での事業実施に向け合同会議を開催した。7 月中旬から 10 月中旬まで 4 回実行委員会を開催し、地区社協・食改・駐在所・青パト・自治会・行政区（町内会）役員・児童クラブ・中学校・保護者・子ども部会・公民館など延べ 49 人が出席した。

イ　準備

公民館は会議案内送付や関係諸機関への依頼など、子ども部会は手作りチラシ作成や当日ボランティアの募集など、保護者はデコレーション製作やお菓子購入、注意看板作製など、準備段階から班での活動とした。児童クラブの子どもたちも夏休みに休憩ポイントの飾り作りで参画した。事業の目玉となる「町歩き」の準備では、駐在さんと一緒に危険箇所や注意看板の設置箇所を丁寧に事前踏査し安全確保を図った。

地域からは、夏の梅や赤シソでジュースを作る申し出もあり、直接の参加が無理でも様々な形で参画への意欲がみられた。当日準備では、数年前までお菓子をもらう側であった中学生が休憩ポイントやエリア内の空き家の飾り付けを担当し手作り注意看板は刑務職員と子ども部会部員とが一緒になり設置した。

中学生スタッフ

ウ　当日

・参加者:子ども 159 人 乳児 9 人 おとな 72 人 自治会大炊訓練 34 人

・ボランティア:中学生 11 人 高校生 3 人 ＡＬＴ3 人 駐在所 1 人 浜田署交通課 2 人 青パト 5 人 刑務職員 9 人 食改 7 人 住民 21 人 保護者 8 人

・協力者:お菓子ポイント 17 戸 スタンプポイント 2 戸

（ア）　始めの会

ALTの先生

保護者のお父さんが進行する始めの会で、旭中学校や他校のＡＬＴの先生方に「トリックアトリート」のネイティブな発音と外国の簡単な手遊びを教えていただき会場内は一気に盛り上がった。

（イ）　町歩き

仮装して町歩き

お菓子ポイントも撮影ポイントも、にぎやかな声と合言葉「トリックアトリート」の元気な声に手渡す地域の人も終始笑顔だった。休憩ポイントはトイレやおむつ交換の場があればいいと言う昨年の声から、自治会の協力で集会所をお借りした。

撮影ポイント

梅や赤シソのジュース、カボチャ煮、手作りパン、いちじくやブルベリーのジャム、特産の赤梨はカット梨や特製ゼリーとして、地域の人の手が加わった地域に有るモノがこの日の為に準備された。

多くのスタッフの中からスタンプを所持している人を探し出しスタンプを貰うというスタンプラリーは、ただお菓子を貰うために町歩きをするのはもったいないという事から、子どもとの交流を図る仕掛けとして平成 26 年から継続している。

（ウ）　防災大炊訓練

「坂本米」の味見

ゴールでは、同日開催の今市･坂本両自治会による自主防災訓練で接点を持った。坂本地区生産者と四つ葉振興会が一緒にブランド化を目指している「坂本米」を使用した大炊訓練で炊きたてご飯を参加者全員が試食した。この味を通して子どもが一人もいない坂本地区のよさを若い世代に伝える事ができた。

エ　振り返りとアンケート実施

協力世帯 19 戸へアンケートを実施した。「自宅に知らない子ども達が来ることは？」に対し 97％の家から「楽しめる」「協力できる」という回答を得た。自由記述からも事業に対する地域の想いが伺えた。また本年度はスタッフにもアンケートを実施し、この事業を通じて描く夢として①こんな地域に②こんな子どもに③こんな自分自身についてそれぞれ記述いただいた。①では「出会った時に話ができ顔が分かり合える地域」「子どもの記憶に残る地域」等、②では「住んでいる所が自慢気に話せる子ども」「おとなと関わり、やりたい事をどんどんして経験豊かな子ども」等、③では「かゆいところに手の届く地域人」「地域の課題を我が事として考えられる人」等、その意識の高さに驚かされた。

３　成果と課題

立場ごとに関係機関が加わる実行委員会で当事者意識が強まった。また当日ボランティアを含め関わる人が子どもの歓声と笑顔から仕掛けていく楽しさにはまり、次回にまで想いを巡らすようになった。子どもの育ちを応援する地域、地域の協力が嬉しかったと言う保護者、また一緒にやろうと言うスタッフ、みんなで動いたからこそ出たたくさんの声と笑顔が一番の成果である。

自治会と相互に協働ができ、子どもを楽しませる事業から子どもと楽しめる事業へのシフトチェンジのきっかけを得た。

４　今後の方向性

事業のメインであるポイントでのお菓子を今市ならではのおやつや“おいり”“ポン菓子”“まき”など地域に伝わる味を取り入れ、若い世代や子どもに楽しみの中で伝承していける場としたい。また自治会との協働は事業のねらいを踏まえつつ、連携可能な部分をともに探していきたい。「何か出来る事があれば」という前向きな地域人を増やし、子ども・高齢者福祉・防災活動などにおいても縛りのない関係性を持ちながら、住民同士の‘つながり’を育んでいきたい。

（文責：大屋マサ子）